

オスカー・ワイルドにおける 童話と『芸術論』との関連性

岩 崎 光 洋^{*}

(I)

1878年のオックスフォード大学のシェルドン講堂でのニューディギット賞受賞詩Ravenna(ラベナ)の朗読をもって、オスカー・ワイルド(1854—1900)の本格的作家活動が開始されたとするならば、彼ワイルドは95年のあの忌わしい事件の2年後に、654行におよぶ悲歌The Ballad of Reading Gaol『レディング牢獄の唄』を書きあげたのを最後に、優美にして華麗をきわめたあの文壇への登場とは、あまりにも対照的な悲惨な状況下の中で、19年にわたった作家活動に終止符をうつことになる。

ワイルドはこの作家として生きた19年間に、詩人・評論家・童話作家・小説家・劇作家・随筆家(ワイルドは87年6月から89年9月まで、月刊雑誌「ザ・レイディス・ワールド」後の「ザ・ウーマンス・ワールド」の編集に携わり、そこで一般大衆向けの軽いタッチの数多くの随筆を書いている。)というように、実に様々なジャンルを、ごく短期間のうちにまるで各ジャンルで、それなりの成功を収めることにその最大の意図があったかのように、ワイルドは次から次へとまことにみごとに、その創作活動の場を変遷して行くのである。このような目眩しいジャンルの変遷の要因としては、なによりも唯美主義運動の旗手、それも第一の旗手たらしとするワイルドの高声心と自負心とが考えられよう。実際、ワイルドのこうした、あまりにも過度で性急な高声心と自負心が原因となり、例のホイスラーとの論争、そして訣別といった事態も生じてくるのである。また、こうした高声心と自負心については、なにも他の人の声を^{*}八戸工業大学一般教育部

聞くまでもなく、ワイルド自身がDe Profundis『獄中記』の中で、「私は私の芸術と文化に対して象徴的な関係に立っている人間であった」(1)とみずからも述べている通りである。一見したところ、ワイルドのこの言葉を語る口調が、ともすれば我々に、ふと気付いてみたらそんな自分になっていた、かのような印象を与えがちなのだが、そうでは決していないのである。まさにワイルドはそのような立場に立つことをみずから求め、みずからそうした時代の象徴たらしとした人物にほかならないのである。

では逆に、ワイルドが象徴としてまで立たんとした時代とは、一体いかなる時代であったのか、ということが当然問題となってくるわけだが、この点については多くの研究書で、すでに何度となく論ぜられているのであえて、ここで詳しく述べる必要はあるまい。ただ、唯美主義運動の第一人者たらしとした芸術家ワイルドを考える際に、The Picture of Dorian Gray『ドリアン・グレイの絵姿』のドリアンの以下の意見に注目することは、有効かつ重要と思われる。「人間の自我を単純な、永続的な、信頼しうる、ひとつの本質から成るものとする連中の浅薄な心理をかれはかねがね不思議に思っていた。かれにとって、人間とは無数の生活と無数の感覚を有する存在であり、思考と情念の異様な遺産をみずから内蔵し、その肉体がまさに死者の奇怪な疾病で汚されている複雑雑多な生きものなのである。」(2)。つまり、ワイルドが象徴として立たんとした時代は、自我とは不変で信頼出来るものであり、従って我々人間はあるがままの自我に対して常に誠実であるべき